

## 通常学級と聴覚特別支援学級の合理的配慮に根ざした指導連携体制の構築

### —小学校英語「見る」音声指導の効果検証—

河合裕美（神田外語大学 児童英語教育研究センター 准教授）

#### 1. 研究の背景と目的

教科となった小学校英語では、英語音声を聴解し、発音し、対応する文字が分かるようになる指導が求められている。通常学級の外国語授業では、聴覚障害児童を含む様々な支援を必要とする児童が在籍する中で、英語音声が聞こえる音環境の整備や教師の指導不安を解消することが課題となっている。英語入門期の児童に話者の発音の口形をよく「見る」傾聴姿勢を育成し、明示的な英語音声指導を実施することによって、(1) 支援を必要とする児童のための「合理的配慮」事項の具体化、(2) 視覚的な学習方略の効果、(3) 英語音声の聴解・発音能力、(4) 通常学級と特別支援学級の連携体制の構築、(5) 教員と児童の英語音声に対する意識の変容、(6) 教員を介助する英語音声指導用視覚的教材の効果を明らかにする。

**2. 研究方法**：千葉県内 A 小学校高学年（5年生）の通常学級担任・特別支援学級担任・ALT らが外国語指導連携体制を構築し、音素認識・音韻認識・音節認識・発音指導を含む明示的な音声指導を外国語授業の帯活動として実践した。通常学級内で支援が必要な児童や下位の児童に机間指導をおこない、指導者が発音する口元や口形を「見る」傾聴姿勢を徹底し、聞こえづらい子音が「聞こえる」音環境づくりに取り組み、聴覚障害児童には個別指導をおこなった。以下のデータ収集をおこなった。

(1) 5年生通常学級の外国語授業の騒音値を計測後、新学習指導要領の4技能5領域の観点から授業内の活動を分類し、授業を録画した動画と騒音値を照合した、(2) 5年生児童の話者の口形への注視時間・英語能力（聴解と発音）・英語学習に対する意識を明示的な英語音声指導の事前・事後で上位・下位グループ別に比較した、(3) 通常学級担任と特別支援学級担任の指導に対する意識の変容について、6年生の外国語授業を録画した動画や担任へのインタビューから質的分析をおこなった、(4) 視覚的教材を活用する授業を録画し、その効果について質的分析をおこなった。

#### 3. 結果

(1) 通常学級での外国語授業において騒音値が高いのは、「話す」領域のうちの「やり取り」や「インタラクション」など対話をおこなう活動で、「リスニング」や「書く」活動は比較的平均騒音値が低い。「発音」の活動は、指導者がモデル発音をする直前で児童が一斉に指導者の口元や口形を一斉に見ることで騒音瞬時値が下がって「静けさ」を実現でき、教室後方に摩擦音のような聞こえづらい音素も聞こえる環境ができる。

(2) 児童の発話者の口形への注視時間が増え、英語能力や英語学習に対する意識が向上した。特に、下位グループの英語能力の音韻認識と発音能力がともに有意に伸びた。聴覚障害児童への長期的な個別指導の結果、聴解能力が先行して伸び、構音能力は後から徐々に向上した。意味表象のある単語や文脈のある内容を用いて、児童の知識を高めるスパイラルな指導が効果的であることが分かった。聴覚障害児童の英語学習不安が次第に解消され、主体的に学ぶ意欲が高まった。

(3) 小学校教員は、指導回数を重ねることで英語音声指導法に対する理解を深め、指導に工夫を凝らせるようになり、支援が必要な児童や英語学習に困難を抱える児童への配慮や指導ができるようになった。学級間や通常・特別支援間での指導連携体制の下、教材を有効活用し、足場かけ（scaffolding）をおこない、寄り添う指導を実行した。

(4) 視覚的な教材は、教員の指導技能を介助し、児童の英語音声に対する気付きや学習を深めることができる。

#### 4. 成果：本研究から、外国語授業中の合理的配慮や支援策が得られた。

- 学級内の聞こえづらい児童に配慮するため、全ての児童に「見る」傾聴姿勢を徹底する。
- 教員や支援員は、授業案や支援を必要とする児童や学習困難児童の情報を共有し、机間指導や個別のケアをおこなう。
- 聞こえづらい児童や聴覚障害児童は、教師の顔がよく見える前方に座り、机に支援スピーカーを設置する。補聴器装用者には、デジタルワイヤレス補聴援助システムを活用する。チームティーチングの場合は、主に発音を指導する教師がロジヤーマイクを持つ。テレビモニターを使って映像視聴する場合は、スピーカーとテレビを接続して聴覚保障を行う。それでも理解が難しい場合は、児童の側に座っている支援員が学習サポートをおこなう（写真①）。



写真①



写真②



写真③



写真④

- 活動別の支援策：「やり取り」の活動では、目標表現についてヒントを与えて質問の意図を理解させ、答えを引き出すような足場かけをおこなう（写真②）。「インタラクション」のような対話活動では、対話者の児童がロジヤーマイクを持ち（写真③）、「発表」の活動では、発表者がロジヤーマイクを持つ（写真④）ことで聴覚保障をおこなう。「発音」の活動では、発音担当の指導者がロジヤーマイクを持ち、発音指導の際の口元・口形を一斉に見る傾聴姿勢を徹底する。「発音」「リスニング」「読み書き」の活動では、聴覚障害児童の机に支援スピーカーを置くことで、教室後方まで聞こえづらい英語子音が聞こえるようになる（写真①）。

公立小学校でインクルーシブな英語教育体制を目指す上で、明示的な音声指導の際の「見る」傾聴姿勢は、英語入門期の全ての児童にとって有益な英語学習方略であり、具体的な配慮や支援によってユニバーサルな学びの環境が実現できる。

共同研究者：松尾理恵（船橋市立薬円台小学校教諭）